# 北野文書 ②「おさしづ」の写し翻刻

おやさと研究所員
安井　幹夫　*Mikio Yasui*

（2）明治廿四年三月三日
さあ〳〵尋る事情〳〵　それ〳〵はこぶ處　たん〳〵心一ツの事情　さき〳〵事情　これ〳〵　又々これ〳〵　どふしてくれ〳〵とハゆわん　心たけうけとるのやで
　一時山本氏名前に約定致ス事
さあ〳〵なるよ事情　それ〳〵事情ハまかせをく　心だけうけ」（４オ）
とる　むりの事情　ならんといふ事情　ならん心たけうけとるのやで
　注　このおさしづは正本に記載なし。

（3）明治廿四年四月廿五日　名古屋支教会設置の願
さあ〳〵尋る事情　はこぶ一ツのりハ　ぢゆう〳〵ゆるそ　十分のりハかゝりてゆふから　りとゆふハちいさい　一ツのりからはこび　ちいさき処」（４ウ）
からほち〳〵はこび　りハ十分ゆるそ〳〵
　同支教会担当人の事情御願
さあ〳〵尋る事情　その処ハたいてい事情はこび　たいていハそのまゝ
　仝支教会柴田久平の地所にて設置御願
さあ〳〵地所の一ツの事情　心だけの事情ハ一時の事情に受取」（５オ）
　注　正本には、このおさしづは、明治二十四年四月二十五日「山名分教会部内愛知支教会設置願」として記載あり。名古屋支教会の設置願はこの日付にはない。名古屋出張所は明治28年10月17日開設。明治33年12月20日名古屋支教会に昇格している。

（4）明治廿四年四月廿九日　日々事情もつて本席様へ願ヒ出ル処　願人壱人　書取人壱人の差図の処　願て貰う人連て出さして貰ひ舛た物か　それハなりません物かの事情願
さあ〳〵事情尋ねかやす処〳〵　尋ね一条のり　身の処さわり一ツにハほうがく　又ハゑんだん身」（５ウ）
上事情尋ねでる処　たいていみわける　一度のさしづ　一度の事情　ゑんだんふしぎ　みんなそれにはなしの事情でわかるよふになれど　どふでも一どふなあといふ事情はこへバゆるそ
いつまでハどふむならん　こふしてゆるそ　こふしてさわりなひ　とこから　どこまでわかりがたなひ事情尋ね一条」（６オ）
さとしてハ中々の事情でない　さしづにまちかうよふな事ハなひ　さとりのりによつてまちがう　願人壱人　書取人壱人　それ〳〵事情によつてゆるそ　何度の事情すれどどふむならん
日をたてば　たれも〳〵といふてどふむならん　尋ねさしづの事情ハあちらのはなし　こちらのはなし　一ツのりに」（６ウ）
いくゑの事情になる　だんじハはなしよふて　よくきかねバならん
　注　「事情すれど」は、正文では「事情論すれど」である。「だんじハ」は、正文では「だん〳〵」である。

（5）明治廿四年五月二日　本局へ出越しの事情御願
さあ〳〵一時たちこす處　事情ハどふゆふ事情　さあ〳〵まあ一時の處　代理をもつてつかわすがよい　代理をもつてはこびかけ」（７オ）
るがよい　さあ〳〵代理〳〵今の處代理でのぼるがよい　さあ〳〵たつ處をねがう　一時といふ　なんにもべつにせへて　どふせんならんやなひ　せへて一ツ事情をはこびかけ」（７オ）
るやない　たの處でハ出てどふはなしをきいて　今の一時ハどふむならん　めん〳〵こふせにやいかん　そも〳〵めん〳〵一時かつてのりをあつ」（７ウ）
めている　かつてのりハ一寸にハいかん　代理をもつてのぼるどふといふりをたてる事ハいらん　なんでもといふ事情ハいらん　をふぼふ一ツのりをもつて　これよふきいてをかねバならん　尋ねて今からといへばたつ處　心をきのふ大丈夫にたつがよい
　注　正本の割書には、(中山会長代理の願）という説明がある。

（6）明治廿四年五月二日」（８オ）
本席身上御障り二付御願
さあ〳〵身上に一寸ふそくなる　ふそくなれバどふゆふ事であろふと　ミなをもふ　尋ねバ一ツのさしづ　もふ事情といふてむつかしい事ハはなしかけた處がいくやなひ　むつかしい事をいふてはなしかけると　あんぜる身上から尋ねかけるから一ツのはな」（８ウ）
し　ミなそれ〳〵きいて　一ツの心をもたねバならん　身上ふそくなるとハどふゆふ事　是迄だん〳〵つたへたる席　順序むつかしい　なんでもなき　むつかしいりハ一ツでいくゑのりもある　そのりがむつかしい　せん〳〵に席事情　とふく一度つれてとふりた道といふ　つれて」（９オ）
とふりた中　をさまる日までの道にいかなるふしぎ　一ツのこふがありたが　どんな事もさしづといふ　よふきいておけ　ああふしぎであつたなあといふ　差図といふ　差図をもつてはこべバしゆよふとゆふ　大きりや　じゆよふきゝとりてといふてのはなし　よふきゝわけんけねバならん　ぜん〳〵」（９ウ）
にも　あんなはなしもきいたが　その道ハまだかいなあといふすみやかはれん　年代の道をいふたなら　さしづといふ事情をもつて　さしづのりをうけて　又々の道ハうけるとおもわれん一寸わかりかねる　身の処ふそくなる　くどふはなしつたへてある　身のをさまりといふ処」(10オ）
よふきゝわけてはあさん　何程とふく処といへど　へんじよと心あれバだん〳〵をさまる　日々といふ　又一ツにハ世上に道がありて　道をつたう心がありて心をおさめる　さしづをたづねバまちかうよふな　さしづハせんで　なれときゝよ　とりよふ　さとしよふによつて　ミな〳〵まちがうてある　たすけ一」(10ウ）
条ならこふゆふりで萬事心によせて　萬事さとりくれるよふ
　注　正文と比較するとき、かなり異なる箇所がある。とくに、９ウ～10オのところはそれが目立つ。たとえば、10オの「さしづのりをうけて」のあと、「するなら、間違う事は無い。」とあり、次の一節は正文になく「身の処ふそくなる」と続く。